MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

2019. 12. 28　発行元

第 24 号　伊藤　剛

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

横溝正史 ベスト表

私たちの年代にとっては懐かしい映画『犬神家の一族』。池の水面から逆様になった脚が２本の構図。横溝と言えば、本当に日本を代表するミステリ作家。“金田一耕助”とともに歴史に名を残している。

角川の映画ブームの時代

横溝正史は、１９０２年生まれで１９８１年に亡くなった。私は「横溝正史の時代」の最後の時期にかろうじて間に合った世代で、『病院坂の首括りの家』と『悪霊島』の２長編だけは、単行本で初版を買うことができた。

私の学生時代は、ちょうど角川映画・角川文庫・角川ノベルスの時代であり、角川文庫版の横溝シリーズが本屋の平台を賑わしていた。角川文庫独特の表紙絵が人目を引き付けた。映画『犬神家』も見に行った記憶がある。

今年の１２月２１日にもフジテレビで『悪魔の手毬唄』を取り上げていたようだ。金田一耕助役は加藤シゲアキだとか。何年経っても話題作りになる作品群なのだ。

右の「ベスト表」に示した作品もその時期に一気に全部読んでしまった気がする。

No１は、やはり『獄門島』

横溝作品のＮｏ１はやはり『獄門島』。日本ミステリのベストテンに必ず入るべき存在である。いかにも日本的な（岡山県…）雰囲気であり、閉じ込められた島の設定、特殊な家族関係、そして“見立て殺人”と、横溝ワールド１００％の設定。

横溝自身は、インタビューに答えて、クリスティーやディクスン・カーの影響を挙げている。涙香や乱歩の流れもあって、ミステリの舞台として「作られた世界」なのだと考えられる。二上洋一は、「まがまがしく、おどろおどろしい草双紙の世界」「官能的耽美的猟奇的傾向」と評している。

次に挙げた『八つ墓村』『本陣殺人事件』から、１４～１５番目あたりの作品までは、まさに傑作ぞろいである。本格謎解きの要素も濃く、「作り上げられたミステリの世界＝横溝ワールド」を堪能できる。

『本陣』の琴の糸の音も、とりわけ印象深く、後々まで記憶に残るものである。細かな話の筋は忘れても、鮮やかに蘇る場面があるというのが、横溝作品の価値。

戦前の作品は短編が主

横溝は、大正の時代から『新青年』などの雑誌に作品を載せるようになり、初期のものはほとんどが短編の形である。「人形佐七捕物帖」などの時代物も多く、たくさんの作品を残している。

私は、全部の作品を読んでいるわけではない。３分の２くらいだと思う。「ベスト表」に何かが落ちているかもしれない。そこは「御免なさい」と言うしかない。

右表中の短編集の中には、いくつか戦前の代表作が含まれている。長編の大部分は戦後の作品。『本陣』『蝶々』が昭和２１年、『獄門島』が昭和２２年の雑誌『宝石』『ロック』の連載である。

《横溝正史作品のベスト表》

１．獄門島
２．八つ墓村
３．蝶々殺人事件
４．本陣殺人事件
５．悪魔の手毬唄
６．犬神家の一族
７．悪魔が来りて笛を吹く
８．三つ首塔
９．女王蜂
１０．夜歩く
１１．病院坂の首括りの家
１２．悪霊島
１３．真珠郎
１４．鬼火（短）
１５．不死蝶
１６．迷路の花嫁
１７．悪魔の寵児
１８．吸血蛾
１９．女が見ていた
２０．怪物男爵
２１．殺人鬼（短）
２２．幽霊鉄仮面
２３．夜光怪人
２４．金田一耕助の冒険（短）
２５．幽霊男
２６．まぼろしの怪人
２７．死神の矢
２８．死仮面
２９．怪盗Ｘ・Ｙ・Ｚ
３０．幽霊座（短）
３１．びっくり箱殺人事件
３２．黄金の指紋
３３．金田一耕助の冒険２（短）
３４．花園の悪魔（短）
３５．夜光虫
３６．大迷宮
３７．迷宮の扉
３８．夜の黒豹
３９．毒の矢
４０．仮面劇場

一応、４０位まで並べてみた。戦前の短編については拾いきれていない。

パシフィカ版名探偵読本８『金田一耕助』…１９７９年にパシフィカから出版された『名探偵読本』シリーズ。その８巻目に入っているのが、『金田一耕助』。この本については、別の号でも紹介するかもしれないが、古書市場では高値で取り引きされているようだ。私もネット上で「一万円」の価格を見たことがある。もちろん、私は持っている。